



目次 1頁 三浦喜代子 3頁 篠田一志 4頁 奈良ノリ子 松下勝章 5頁 安東奈穂美  
6頁 長谷川和子 8頁 山角正子 9頁 西山純子 10頁 横尚子 11頁 本田真貴 13頁 山本悦子  
<駒田兄の思い出(14頁〜)>横尚子 西山純子 篠田一志 長谷川和子 三浦喜代子 18頁 編集後記

## クリスマスは光から 三浦喜代子

### ★羊飼いの光

クリスマスは光から始まった。  
天のみ使いは暗い夜空の下で羊の番をする羊飼いたちに、イエス様のご降誕を最初に知らせた。その時主の栄光が周りを照らしたと聖書は語る。

み使いは『今日、あなたがた方のために救い主がお生まれになりました』と告げる。  
目もくらむような光の中で、羊飼いたちはこの良い知らせを聞いたのである。世界でいちばん先だったとは知らなかったろう。

時は真夜中、小さな星のまたたきもとどかない暗闇の山野に、真昼より明るい光が彼らを抱んだのだ。彼らは世の底辺を這うように暮らす貧民である。心にも光はなかったであろう。  
突然の良い知らせ、突然の光、とまどう彼らの上に天の軍勢の歌声が響き渡る。

『いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が御心にかなう人々にあるように』  
光と賛美の声は彼らの重い心の扉を大きく開け、一瞬にして歓喜で満たしたにちがいない。光は命である。彼らのうちに命が満ち満ちた。新しい命が躍動した。

うずくまっていた彼らは立ち上がった。彼らは都ベツレヘムへ駆けて行った。飼葉おけに寝ておられる赤子イエスを礼拝し、町中に触れ回った。彼らは最初の礼拝者であり最初の伝道者になった。何というあわれみ、なんというめぐみであろう。神は『無きに等しきものをあえて選ばれた』！ クリスマスは光から始まった。

### ★マリヤの光

み使いガブリエルに受胎を告知されたマリヤはひどくとまどった。一瞬目の前が真っ暗になり恐れおののいた。しかしガブリエルは『怖がることはない。マリヤ』とやさしく語りかけた。マリヤはまだ年端も行かない少女であった。ガブリエルは天の光で暖かくマリヤを抱んだであろう。その光はマリヤの心深くに射し込んだ。マリヤは『私は主のはしためです』と身をかがめて従った。マリヤの従順が主のご降誕にうるわしい光を添えた。

マリヤはナザレから遠くユダの町までエリサベツを訪ねた。老女エリサベツと乙女マリヤはハグし合って互いの使命を感謝し喜びにあふれた。マリヤの唇からあの賛歌があふれ出た。『わがたましいは主をあがめ、わが霊はわが救い主なる神を喜びたたえます。この卑しいはし

ために目を注いでくださったからです』。

マリヤはうら若い乙女だったが、自分の貧しさ弱さを知っていた。さすがに主の母になるにふさわしい賢い女性だったと思う。光は水に似て、低きに向かって走る。

### ★パウロの光

クリスマス飾るメンバーではないが、パウロもまた天の光に出会い、ひれ伏して改心し、聖書中最大の宣教者になった。

パリサイ人出身、主の民の迫害者である彼が、ダマスコへの途上で光に打たれた。復活の主が待ち受けていたのである。光は彼の信仰を一変させた。自分の義ではなく、イエス様の贖いのみわざによる義を信する者へと新生したので。

パウロは光がアガペーの「愛」であるのを知った。『いつまでも残るものは信仰と希望と愛です』と確信に満ちた書簡を書き送っている。この言葉は二千年を経た今も多くの人を励まし、私の信仰の旗にも書き込まれている。

そのパウロが、『私は罪びとの頭です』と大胆に自己の弱さを告白し、『神の恵みによって今の私があります』と、光の前にひれ伏している。光は命であり言葉である。『ヨハネの福音書』によれば最初に言葉があり言葉に命があり命

は人の光であったとあとさきがていねいに記されている。が、順番は優劣を意味しないと思う。同質と考えたい。なせなら、主イエスは『私は世の光です』と言われた。

### ★光であるイエス・キリスト

十一月中旬になると巷は早くもクリスマスイルミネーションであふれる。街路樹一本一本にまで電飾線が巻き付けられ七色に瞬く。近頃は戸建ての住宅にも光入りのリースやツリーが飾られる。まるでキリスト教国のようだ。しかしクリスマスの本質であるイエス様はどこにも見当たらず、異質のクリスマスが独り歩きをしている。いくらきらびやかでも、人の心は人工の光や雰囲気だけで真に満たされるのだろうか。

私はクリスマス光の中でも礼拝堂にしっかりとクリスマスクランツのろうそくの火が好きだ。ろうそくの火はかよわく、いつも小さく揺れている。まるで呼吸をしているようだ。華やかさはないが暖かさがある。静けさがある。そっと人の心の中にも灯る。心がおだやかになる。クリスマスの主、イエス・キリストの愛のようだ。

イエス様がベツレヘムの家畜小屋で産声を

あげられた時、大きな星の光を頼りに、遠く異国の地から博士たちが訪ねてきた。マタイの福音書はそのいきさつを楽しく記している。

日頃から天体を観察していたと思われる博士たちは不思議な星を発見した。その星こそ待望のメシヤ到来のしるしに違いないと確信し、星を追いかけた。星はイエス様のおられる真上でとどまった。彼らは喜びに満ちて、黄金、乳香、没薬を捧げて礼拝した。

星の光はイエスさまの寝顔とマリヤ、ヨセフを明るく包み込んだことだろう。

三十歳でご自分の使命に立ち上がったイエス様は『私は世の光です』と公言し、闇の中を生きる人々を招いた。『私に従う者は・・・闇の中を歩くことはなく、いのちの光を持つのです』と約束された。

貧困、病気、虐待、搾取、戦争、不安、恐れ、憎悪・・・これが世である。闇の世界である。人はそこであえいでいる。イエス様はそのただ中にご自分の命を丸投げして入って来られた。闇に打ち勝つ光として。従う者を光と子としてくださるために。

主の光の方へ行きたい。光に出会い、光の子になりたい。マリヤのように賛美したい。『我がたましいは主をあがめ・・・』

## 今年のクリスマス 篠田一志

「神は「光あれ」と言われた。すると光があった。(創世記1・3)」。

神さまが最初におっしゃったお言葉です。そして、天地創造の働きが始まりました。

それから、数千年の時を経て、ナザレの町で、光の人がお生まれになりました。イエス様の誕生です。

イエス様は神の御子でしたが、乙女マリアからお生まれになった、まことの人間でもありました。

叩かれれば、痛みもあります、切られれば、血も出ます。

私たちと同じ肉の体であり、悪魔からも幾度となく誘惑をお受けになったイエス様でした。

パウロ先生は、そのような、イエス様を「キリストは神の立場を捨てて、人間と同じ姿になられた。そして御自身を無にしてまで他に仕える者となってくださった」(ピリピ2・5、6)と語っておられます。

つい先ごろですが、そのパウロ先生の教えを体験する恵みのときが与えられたのです。

それは、ウクライナとロシアの戦争が始まり、

一向に終わりを迎える様子もなく、ますます激化しているときでした。だれもが、戦争は良くない、どんな理由があろうが戦争はしてはいけないとわかっているはずなのに、終わる気配のない社会の愚かさよりも、その愚かさには抗うどころか、埋没している自分が虚しく嫌になりました。やがて、その思いに支配されたのか、祈ることもままならない有様でした。

そんなときです、主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです」(ヘブル2・18)の聖句が与えられたのです。

しばらくして、あしあと(フットプリント)の詩が浮かんできました。

作者が主とともに海岸を歩いている夢で始まる詩です。砂浜に二組の足跡があることに気がつきます。ひとつは主のもの、そしてもうひとつは作者のものでした。

やがて、詩のクライマックスのシーンを迎えます。

作者は砂浜の足跡を振り返って見ました。すると彼が歩んできた今までの道の多くの時に、たった一人分の足跡しかないことに気がついたのです。そしてそれはまた彼の人生で最も困難で悲しみに打ちひしがれているときのもの

でした。

彼はこのことでひどく悩み、主に尋ねました。「主よ、かつて私があなたに従うと決心した時、あなたはどんな時も私とともに歩んでくださると約束されたではありませんか。でも私の人生で最も苦しかった時、ひとつの足跡しかありません。私が最もあなたを必要としていた時、どうしてあなたは私を置き去りにされたのですか？」

すると、主は答えられました。「私の高価で尊い子よ、私はあなたを愛している。決して見捨てたりはしない。あなたが試練や苦しみの中にあつた時、たった一組しか足跡がなかったのは私があなたを背負って歩いてきたからです」。

以上が、詩の要約です。

この詩を初めて読んだのは、もう30年も前のことでした。はじめ、この詩は作者不詳となっていたと思いますが、最近になって、カナダのクリスチャン女性(マーガレット・F・パウーズ)であることが分かりました。

不思議に心に残る詩でした。それから、幾度となくこの詩に出会うことがあります。そのたびに、励まされ、また慰められもしました。

その日も、その詩を口ずさんで思いあぐねて

いますと、背負われているのが、自分だと気づき始めたのです。

いまは、虚しい気持ちでいっぱい自分です。喜び、折れないクリスマスチャンでもありません。でも、それでも良いではないかと思えたのです。開き直りではありません。むしろ、そんな自分だからこそ、イエス様が憐れんで背負って下さったのだと素直に喜ぶことができたのです。

もうすぐ、クリスマスを迎えます。

今年のクリスマスは、イエス様の暖かい背中のぬくもりの中で、ゆっくり休ませていただきたいと思いました。



## 光と力の源

奈良ノリ子

私は中学生時代に聖書に触れ、そのまま信仰生活を続けています。「光」の中を歩ませていただいていることを感謝を持って記させていただきます。

『また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この

聖書は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして神に仕える人は、どのような善い業も行いうことが出来るように、十分に整えられるのです』

(テモテへの手紙二 3・15～17)

主イエスのご降誕を迎えようとする私たちは、この聖書はキリスト・イエスへの信仰を通して救いに至る知恵を与えることができる「光と力の源」であることを知っています。

あなたの言葉をまだ聞いたことがない人たちがいます。その人たちにみ言葉を運ぶ人々を、どうぞ祝福してください。

## 光に歩む

松下勝章

若い日にとめどなく涙を流したことがある。絶望の涙である。絶望の哲人、かのキェルケゴールが、絶望を記したのは、少なくとも、キリスト教の素地のある社会の中であつただろうが、当時、私の環境は、キリストとは、まったく無縁であつたため、誠に救いようのない絶望であつた。

(嗚呼、人間は、救われないのだ)

という実存的な確信に、突然、包まれてしまった。

ジョン・ダンという英国の神学者詩人が『波』と読んだ忌まわしい存在、即ち、『死』の力が自分の身にもへばりついていて、やがて、その力に浚われる身なのだ、その力は、極めて圧倒的で、執拗で、所謂、『努力』であるとか、『訓練』であるとか、『財』であるとか、『つながり』であるとか、『修身』であるとか、『知恵』であるとか・・・では、太刀打ちできないと感じた。

医者や寺の住職は、その『死』の力と結託し、弁護士は、事務所経費のために、若い夫婦の離婚話にほくそ笑む。老人は、『福祉』の名のもとに食い物にされる。

(善良を装いつつ、実は偽善。従順を装いつつ

つ、実は打算)などと、世の中を斜めから見つ、実は、自分もその中の一分子として、その力に侵されているのを感じた。半世紀前の正義が、全くのデタラメであったにも関わらず、かりその正義を盾に、裁きを行いつつ、自分は、その裁きの外に、チャッカリと隠れる。裁判官も信じられなかった。

愛を唱えつつ、人から甘い汁を吸い、蓄える。本当に力になる働きは、危険を伴って産み出されたにも関わらず、産み出した者たちは、奪われ、名を残さず、消されてゆく。そして、奪った者も、やがて、ボロが出て廃れる。

朽ちるもので蒔かれという御言葉にあるように、唯々、老いと死の力に浚われるのだと感じた時、自然と涙が、頬をつたって流れ落ちた。その姿を憐れまれたのだろうか、ふとしたことで、その死の力の圧倒に、浚われない光の存在を知った。光は、闇の中に輝いている。そして、闇は光に勝たなかった、という言葉を目に受け止めた。今想うと、あれは、聖霊の働きだったのだろう。

私が、出会った一点の光は、その勝利の力の中、イスラエル民族の選民性を証し、その民を捉える人格的存在の現臨を証する。そして、その民族を取り巻く他の民族の歴史との関連の

中で、その存在の全世界的な臨在を証する。

その光は、時空を超えて、一方は、創世記に連なり、一方は、現在を生きる我々に、そして、終末へと連なっている。

その光は、沸々と生まれ来る罪を打ち砕き、不敬を受け流し、許しを与える。光の声は、『信じて、洗礼を受ける者を救う』と約し、その名のもとに集まる者と共にいて、礼拝を与えたと約する。

豊かさ、圧倒的豊かさが我々を包む。本来、我々は、主の臨在の中に、圧倒的豊かさの中にいるのだろう。

『死』を砕いた魂と共に、我々は、先立った魂と会合する。共なる契約を知る故に。縁者も其処にいる。

しかし、選びの言葉は重く、その二文字の言葉の中に、慰めと安らぎと共に、新たな絶望を知る。

憐れみは、裁きに打ち勝つ、の言葉を意味もわからないまま、心に抱いて、我は、光と共に歩む。

(憐)

## 足元を照らす光 安東奈穂美

私はクリスチャンではない両親の下に生まれました。近所の仏教系幼稚園ではなく、隣町の教会附属幼稚園に入園し、神様のお話を聞きました。

自分で聖書の言葉を読んだのは六歳の頃です。クリスマスの降誕劇で朗読の担当になり、羊飼いたちが野宿をしながら羊の群れの夜番をしている箇所を読みました。父がノートに書いてくれた文字と共に印象に残っています。

卒園の記念品は新約聖書でした。少し大人になったようで嬉しく、時々、開いて眺めていました。

しかし、小学生時代は教会学校に通うことはありませんでした。中一の春、友人に誘われて初めて教会に行きました。卒園した幼稚園とは別の教会でした。違和感をもつこともなく、続けて通うようになりました。

中二の夏、バイブルキャンプに参加し、自分に罪があることがわかり、イエス様が救い主であると受け入れました。「聖書は神のことば」「神は愛」など、聖書の言葉が心に蓄えられていきました。そして、中三のクリスマスに洗礼を受けました。

ある時、中学科の生徒に新約聖書の聖書通読表が配られました。マス目を埋めていくのが楽しく、マタイの福音書からヨハネの黙示録まで読み通すことができました。

高校はミッションスクールでした。聖書の授業があり、旧約聖書から新約聖書まで、各書名を覚える課題がありました。テスト対策で、鉄道唱歌のメロディーで「創、出、レビ、民」と歌って覚ええました。これは今も役に立っています。

高二の夏、参加したバイブルキャンプのテーマ聖句は「すべて神の栄光のために」でした。講師の先生が語るメッセージに心が震えました。神様の愛に包まれ、その愛の大きさに圧倒されるようでした。生涯、この聖句を大切に生きていこうと心に決めました。また、伝道師の先生の勧めに従って、箴言を繰り返し読むようにもなりました。

高三の秋には、突然、母親を喪う経験をしました。もう、教会を離れてしまいかもしれない、と感じましたが、なんとか離れずにつながっていました。今、思い返すと、牧師先生ご夫妻や教会の方々が熱く祈っていてくださったのだと思います。

二十歳の頃、聖書全体を通読してみようと思

うようになり、少しずつ読み進めて三年くらいかけて読むことができました。内容をすべて理解できた訳ではありません。でも、わかってもわからなくても、まず読むことが大切だと思いい、今に至るまで四十年余り、通読を続けています。幼稚園を卒園した時、新約聖書は一冊の本でした。今は、神様の言葉として、また、神様からいただいた手紙として、「本」という概念を超えました。

進学、就職、結婚、妊娠、出産、子育て、介護…人生の色々な場面で聖書が支えとなってきました。生きる指針といえるでしょう。特別なことがないと思われる日常も、聖書を開けば、神様の光が差し込んで、日々、生かされている恵みを感じます。いつでも、自由に聖書を読むことができるのは、なんと幸いなことだろうと思います。聖書が指し示す光を見つめて歩いていきたいと思えます。

あなたのみことばは 私の足のともしび  
私の道の光です。

新改訳二〇一七

詩篇一九篇一〇五節



## 光に導かれて 長谷川 和子

今夏、今までにない目まいに見舞われた。

七月二十日に四回目のワクチン接種をした。「様子を見るために三〇分間待合室に居て下さい」と受付の方に言われたので時をまち、何事もなかったので医院を後にした。

注射は「チク」としただけで異状も起きず（良かった・・・）と足取りも軽く二〇分の道程を讚美歌を唄いながら帰宅した。

ところが翌日の夕方より、立つ度に後に仰向けに倒れることが繰返えされた。頭と首から滲れるように汗が滴り、タオルで拭いてもすぐにぬれてしまう。車酔いをしたような感覚になった。立ち上がるのが怖かった。

その原因が目まいによるものだと気づいた。

ベッドから起き上がる時、家具がぐるぐる移動し、横になるときは高いビルから落下するような感覚におそわれ、時にはベッドごと落下し、ベッドが落ちないようにしっかり掴むのだがドンドン落ちていく。「落ちる、落ちる、神さま助けてください」と叫んでいた。

あまりの苦しさに「救急車を呼んで！」と娘に言ってしまう。「コロナが流行っているとき

に救急車は無理よ」と言われ、充分分かってはたはずなのに・・・と反省した。

それでも娘はワクチンを打った医院に連れて行ってくれた。

事情を話すと「食事がとれていないので栄養と目まい止めの点滴をしましょう」と言い、「先生治りますでしょうか」と不安の気持ちを訴えても、「具合が悪かったら又来てください」と言うのみ、不安の気持ちは増すばかりであった。目まいは治らず、次の日娘は医院に電話をし目まいの薬をいただきたい旨を伝え、取りに行ってくれた。薬の効果もなく、その後、四十三日間に渡り、目まいとの戦いの日々を経験したのである。

脳に異状があるのではと思ひ、一週間後神経外科でMRIを撮るが大丈夫とのこと。

「ワクチンの後遺症でしょうか」と医師に問うたが「そうですね」とは打った医師同様言わない。しかし「頭を高くするようにベッドを上げたほうがいいよ。起きるときはゆっくりと、下に落ちたものは拾わないように。」一人暮らしですか、誰かいるといいですね」等々優しく仰って下さったが不安は拭えなかった。耳鼻科も受診したが異状なしであった。

「一年以上も目まいが続く人もいます」と女

医に言われ、不安は募る一方であった。

受信したメールも読むことも返信することもできず、予定していたJCPのリモート会議も私のために中止となった。時には娘から返信を打ってもらおう事もあった。

当然ながらTVはもちろん、本や新聞も読めず天井を仰ぐ日々（床擦れができるのでは）と思ったほどである。

医師に言われたようにベッドの上半身の部分を高くし、少しでも頭を動かすと目まいが起きるので両手で頭を押さえながら、ソツと起き上がるようにしたが目まいは消えず、しばらく納まる間「主の祈り」を称える。

やおら立ち上がり、テスリにしっかり掴まらないと後に転倒しそうになるので「神さま、神さま、イエスさま」と声に出し更に手に力を入れる。何故か就寝時には七回もトイレへ。熟睡することもできず、そのせいか翌日に肩こり頭痛に悩まされた。少しでも楽になるように肩に湿布薬を貼るのだが、うまくいかず一人暮らしの悲哀を苦笑しつつ、感じさせられた。

娘は早朝食事を持参、食することが困難のときには食べさせてくれた（ああ、やがて老いて寝た切りになったら、このように食べさせてもらうようになるのだ）と思った。

庭の木々や植物に水やりをして「じゃね、気をつけてね」と娘は一キロ離れた家に帰り、三人の子供たちに朝食を用意し、勤めへと、この娘の存在があればこそなんとか過ごすことができたのである。

五年生の孫息子は植物の水やりやゴミ出しをし、心配そうに私の手をしっかりと握ってくれた。高二年の孫娘は「大丈夫」と言って手を握ってくれた。どんなにか心強かったことか。起き上がってしまえば目まいがしないことに気づき、台所に立って食事作りに精を出した。頭を枕に付けるときと起き上がるときの目まいは相変わらずであり、治るのか・・・と絶望の文字が心を支配した。

八月も過ぎ、目まいがするたびに「神さま、神さま助けてください」と声に出して祈った。ある時「主われを愛す、主は強ければわれ弱くともおそれはあらず、わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す」と口をついて出、讚美歌四六一番を唄っていた。絶望的に思えた私の前に一筋の光明が見えた時であった。

「神さま光の道をお示し下さい」と祈り、いつものように目まいが静まる時を待っている

と「神はこの世を愛して下さった。それはみ子を信じる者が一人でも滅びないように永遠の命を得るためである」。

この聖書のことばを口にしていた。(あつ、この聖句は今まで毎朝カーテンを引き、窓を開けたとき必ず、飛び込んでくる言葉ではないか) 「目まいは治る」一筋の光が確信に変わった時であった。翌日、目まいは消えていた。

この度、私は多くの方々の祈りに支えられた。教会の牧師は二度も訪ねてくださったが対応できず、玄関前の車から祈ってくださいました。教会員の方々、JCPの仲間たち、親しくして下さっている友人たちの励まし等々に支えられた。何よりも神さまの愛に包まれての回復であったと実感している。

今、元の体になり、年相応の不調はあるが(こんなに楽であったか)と思えるほど自由に行動できることに感謝している。

それだけ、あときは苦しかったのだと。

これからも神さまが与えて下さった光に向かって、歩んで行きたいと思っている。

## 趣味の旅 山角正子

社会が疲弊している現在、このように呑気な文を寄稿してよいのかなと思いつながら書いています。

書道、ペン習字、パステル画、ちぎり絵、文章、朗読、パソコン、英会話、オカリナ、ヴォイストレーニング、体操、アクアビクス、フラダンス、着物着付け、洋裁。この羅列に皆さんは何を連想されるでしょうか?カルチャーセンターの講座一覧と思われる方が多いと思います。実は恥ずかしながら私の受講履歴です。ほとんど中途半端に終わってしまっている事を告白します。

職業を持つている時には、精神的にも時間的にも余裕が無く、通信講座を中心に細々と学んでいました。退職後、堰を切ったようにいろいろと挑戦するようになりました。初めに受講したのは体操教室でした。「仕事から解放され、昼間にこうして体を動かせるのはなんと幸せなのだろう」と感謝しました。「神様は人間に八六〇万個の脳細胞を下された。そのうちの二パーセントしか人間は使っていないそうだ。神様に申し訳ない。脳細胞を活性化する時の到来」

と張り切りました。

今、熱中しているのは洋裁です。コロナがはやり始めた頃、日本でマスクが不足しました。不織布マスクは手に入らないので、布マスク作りがもてはやされました。毎日違う手作りマスクを着けて登場する某政治家が注目されましたが、材料のガーゼ、ゴム紐を手に入れるのは私たちには至難の業でした。ガーゼの代わりにハンカチや手ぬぐい、柔らかい布などでマスクを作る人が増えました。

私も家族・自分のために、マスク作りに果敢に挑戦しました。初めは縫い目が曲がったり、ほつれたり、形がいびつになったりでしたが、だんだん上達し家族にも喜んでもらえるようになりしました。そして、これが洋裁デビューの糸口となりました。

布マスクの材料を探しに行った手芸店で、ロクミンシン洋裁教室の生徒を募集していたので、即申し込みをしました。「洋裁教室に入ったよ」と従妹に告げたところ「えっ。子供の頃からずっと手芸が大嫌いだったよね」という反応。友人たちは「あなた位の年になると目が悪くなり洋裁を卒業する人が多いのに、これは素晴らしいの?」「新しいことに取りかかるのは素晴らしいことね」と様々な感想でした。



洋裁の基本すら全く身につけていない、非常に手のかかる生徒でした。生地を選び、布目を正し、型紙に沿って生地を切る、ロックミシンに四本の糸を通す、針が布から外れないように縫う、縫いはじめと縫い終わりの糸の処理の仕方など一つひとつ丁寧に教えていただきました。基礎コースで十着の洋服を作り、洋裁学校通いを自主的に終了しました。

不織布マスクがいつでも手に入り、布マスクの効果は不織布マスクに比べると劣るようなので、今はマスク作りをしています。もつばら孫娘の洋服を作っています。手芸店で生地や必要な小物を選ぶのも楽しみです。できあがった洋服を着ていっばしのモデルのようにポーズをとる孫の写真をみると、笑みがわいてきます。可愛い洋服を着ている女の子を見ると「あの洋服はどのように作るのだろう」と気になります。日野原重明氏がいくつになっても新しいことに挑戦することを推奨されていましたが、私の趣味探索の旅は洋裁で完了したのであろうと、感謝のうちに思います。洋裁で脳細胞がたくさん使われることを期待しながら。



## 命 西山純子

毅くんとは小学校低学年、彼の二年生か三年生頃から知り合いだった。聡明で静かな少年だったが、会話は元気でハキハキしていた。

私はその頃、依頼されたこともあり、小さな教室でお子さんたちに、学習の基本のようなことを指導していた。毅くんは、その生徒の一人だった。やがて彼のお母さんは教室の助手さんとして、私を支え手伝ってくださった。途中二年間ほど、お父さんの転勤で関西に越されたが、お母さんの力もあり、学習はそのまま通信という形で継続されていた。

高校入試まで、クリクリとした目の輝きある表情からも優秀な少年の一人として育てて行くのを見せてもらった。その後、慶応大学に入學されて卒業、彼の希望通り弁護士になられた。正義感と優しいけれど強い信念のある青年に成長して行った。

同じ弁護士志望の女性と結婚なさったことも母上からご報告があった。彼は有能な弁護士として自分が活躍することよりも、貧しさの故に弁護を得られない人々のために力を尽くしたいと願っていた。結婚した相手は「私の願いは、そうゆう貴方ではなかった。第一線に立つ

て有名になってほしかった」と言い始めた。残念だけれど、彼女は別れを言い、去って行ったそうだ。

やがて新しく彼を好ましく想う女性が現れ、結婚し可愛いお子さんも与えられた。幸せな家族の写真も見せていただいた。

毅くんの母上とは年に一回は昔の仲間と会食、懇談の機会を持っていた。コロナの最盛期三年ほどは中止したが、この夏から復活した。暑い初夏の一日であったが、楽しくお喋りし、涼しくなったらまたお会いしましょうと約束した。

ある日、母上からメールをいただいた。「ちよつと悲しいお知らせです」という書き出しで、九月十七日に毅くんが亡くなったお知らせだった。お宅で歓談した折にチラと五月に毅くんがコロナに罹り、後遺症がまだあると伺っていた。あれからずっと具合悪かったのだろうか？連休で、お嫁さんはお子さんを連れてご実家に、たまたま泊まりがけでお出かけだったそうだ。病院で解剖、調べているが、まだ原因は不明とのこと。一生分の親孝行をしてくれたので、安らかに眠って欲しいとあった。

最近体調不振な私は、いつもの自分よりずっと激しい驚愕に襲われた。

何故・あの毅くんが・・・そう問い続ける思いに囚われ涙が止まらなかった。

娘に寄り添われ青空の美しい日、毅くんのご実家に伺えた。彼は初心を貫いていて困難な状況に在る方々の為に多くの働きをされていることも知らされた。そのリーダーとして立っていた。母上は気丈な活力のある方で、笑顔で語り合った。地上では会えないけれど、神は永遠の命を約束してくださっている、私は信じている。決して永遠の別れではないと、お話させていただいた。

ずっと、これからも親しくお交わりしていきましよう、友人である毅くんの母上と、明るくお話し合いが為された。

陽射しいっぱいのお部屋で娘を含め三人で語り合えた時間を、終生私は忘れないだろうと思つた。

この時をくださった神に、そして毅くんに、母上に感謝が溢れる。

やがてイエス様の降誕日クリスマスをお祝いいたす。毅くんの母上には初めてクリスマスカードを贈りたい。

## 神様はどいつ 榎 尚子

新築して五年になる教会堂の入り口にナラの木がある。狭い花壇を花いっぱいにしてようとした方が堆肥用に近くの公園から落ち葉を運んできた。その中に公園の大きなナラの実、どんぐりが入っていたのである。どんぐりは狭い花壇の中でけなげにも芽を出した。花壇係は大きく根を張って隣家へ侵入しないようにと大きい鉢に植え替えた。わたしたちは思いもかけない新築祝いに喜んだ。この若木は教会堂と同じ年齢だからである。

初めてどんぐりの実がついていることに気が付いたときは、大喜びした。確かに成長していることが分かったからである。ほらここにもと実の数を確かめた。

今年の夏は特に暑かった。太陽の強い光は幼い木には強すぎたのだろうか。葉っぱが全部落ちてしまった。水をあげても戻らなかった。その時のみんなの落胆ぶり。しかし秋になるとまた芽が出てきたのである。誰もが声を上げて喜んだ。

私たちの日常を見れば、世界を一変させる

出来事が起こっている。コロナが始まって三年目の冬を迎える。その間何もなかった、できなかったという思いがある。そのうえ二月からは戦争が始まった。どこかの遠い国の出来事ではない。情報は瞬時に世界中に送られる。電気と水と物資がない寒い地で、あの爆撃音の中で、日々どんな暮らしをしているか胸が痛む。ウクライナは札幌よりもっと北にあるらしい。いつ収束するか世界のどんな知者にもわからない。いや、わかっているもできない。

デジタルの普及とそれを上回る技術が多くの達成感と不安をもたらしている。気候変動・温暖化による弊害はあと数年でこの地上がとんでもないことになるかと警告を出している。何年も前から科学者が数値を出しているのだ。だが具体的な取り組みには程遠い。これらはみな人間が絡んでいる。ここ半世紀にわたって多くのものが開発され便利になった。良かれと思つて努力したことによって、人は苦しむことがある現実はどうすればいいのか。目に見える形で災いが示されている。創世記では神様はこの地上をお創りになつて「よし」とされたのではなかったか。

そしてもうすぐクリスマスが来る。旧約時代の人々はクリスマスを知らない。今、地上のかかりの人がクリスマスという言葉を知っている。その本当の意味を知っているかどうかは別にして。

半世紀前の小学校一年生。

「神様を見たことがある人いますか」

「私、夢で見たわ」

「僕、絵本で見たよ」

「神様にどうしたらお会いできるでしょう」

「おいのりするといいよ」

「電話かけるといいよ」

「神様は『天にまします我らの父よ』だから、天にいらっしやるんでしょ」

「世界中のはしごをつなげてみるといいね」

「雲は雲だからはしごなんてかけられないよ。天は高いから困るね」

「飛行機でも届かないなあ」

「ああ、富士山の上で呼べばいい」

これは半世紀前のある学校通信の記事である。この会話をした子供たちは、今はもう社会の中堅になっているはずである。

神様はどこに。

ナラの木は樹齢千年といわれる。大人の木

になるまでに百年、そのあと何百年も生き続け、ゆつくりと土にかえっていく。教会のナラの木はこれから先、九九五回クリスマスを迎えることになるかもしれない。

私たちはクリスマスにイエス様とお会いすることができる。それだけではない。イエス様はいつもそばにいる。主が近くにおられることを感謝できる日々でありたい。「主は来ませり」と高らかに賛美したい。



## いっちゃんのクリスマス 本田真貴

今から六十年ほど前のお話です。

ある冬の日の朝早く、いっちゃんはお父さんからおきて、朝ごはんを作りはじめました。はく息が白い寒い朝でした。いっちゃんは小学四年生の男の子。お母さんはいません。病気のお父さんと、貧しい二人べららです。

いっちゃんはお父さんをたいて、青菜のみそ汁を作りました。おかずはたくあんだけです。

お父さん。朝ごはんは美味しかったですよ」

いっちゃんが声をかけると、お父さんは「ほほせきをしながら、ふとんの中で体をおこしました。

お父さん。うまそうだ。いっちゃんもすっかりごはん作りが上手になったな」

いっちゃんはお父さんかんとお父さん

お父さん。いっちゃんはお父さんかんとお父さん

いっちゃんはお父さんかんとお父さんかんとお父さん

いっちゃんはお父さんかんとお父さんかんとお父さん

いっちゃんはお父さんかんとお父さんかんとお父さん

いっちゃんはお父さんかんとお父さんかんとお父さん

いっちゃんはお父さんかんとお父さんかんとお父さん



をいじり、

「おお、お父さんの病気が治ったのね」

と、「アイン」おばさんはひょく抱きしめてくれました。

子供たちは、あめとせんべいをもらい、期待でむねをふくらませています。きよこのよる「さんびかをみんなで歌い、イエス様の劇を見ました。イエス様が貧しく馬小屋で生まれたこと、すべての人の身代わりになって十字架にかかって死んでくださったこと、三日後によりがえった救い主であることを知りました。ゲームもして楽しくすごした時間でした。

ろうそくの光の中、いつちゃんのぽっかりあっていた心の穴がふさがり、温かい愛がしみ通りました。

イエス様と出会ったいつちゃんは、その後、たくさん勉強して大学に行き、貧しい人や病気の人を訪問して助ける、福祉の仕事をする人となりました。



## シャロームカフェをオープン 山本悦子

二〇二二年は思いもかけない幕明けとなりました。一月、私が股関節の手術をすることになり、三月に教会に復帰してみると会計の不正が発覚、心臓がバクバクするほどの衝撃を受けました。姉と妹の協力で何とか会計報告をしました。

数週間後、祈りの内に導かれて、私は教会員の前で土下座しました。任命責任をとって謝罪したのです。

ちよと、会堂建設の借入金を完済した矢先でした。返済のためには夫の食事まで節約してもらった歳月でした。被害額はなんと、いざという時のために返済とは別に蓄えてきたものとほぼ同額でした。しかしこれは不正の穴埋めに使うためではない、プロジェクター購入ほか、教会にプラスになるための用意だったのです。日頃から「何があってもビクともしない教会」でありたいと願っています。さすがにビクビクドキドキでした。

若いころ私は五人の姉妹たちと教会に献身し牧師の薫陶を受けました。教えの中の一つに「経済の確立なくして信仰生活の確立はない」があり、この教えは六〇年の信仰生活の底に今

も流れています。

そんなある日、主は「シャロームカフェ」を立ち上げることを命じられました。先に「朝拝会」、次いで「アシユラム」を立ち上げ、もう間口は広げないと決めていたので意外でした。一〇月一日、「シャロームカフェ」がオープンしました。地域である前河原の憩いの場として用いられるように祈っています。

二〇二二年の幕が降ろされようとしています。いろいろあったなあ……。

新しい年はどんな年だろう。「何があってもビクともしない教会」でありたい。何よりも受洗者が次々に起こされること願いつつ、世界中の教会にクリスマスの祝福を祈ります。

『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出て行って実を結び、その実がいつまでも残るようにと……わたしがあなたがたを任命したのである』

ヨハネ一五・16〜17

## 駒田隆兄の思い出

兄は二〇二二年十月二日に召天。九二歳。



### 本の虫 駒田さん 横 尚子

駒田さんがいつどんなきっかけで日本クリスチャン・ペンクラブに入られたかはわからないが、たぶん私と同じころではないだろうか。

満江先生時代、毎年夏に熱海で夏期学校をしていた。そこではじめてお話しするようになった。

夏期学校では夜に理事会がもたれ、同じ部屋の三浦さんや西山さんはそちらに出席、私は一人部屋にいた。そこでロビーに行ってみると、駒田さんが一人座っておられたので、なんとなく自己紹介や夏期学校の感想など

を話すようになった。

その後例会に熱心に出席されている駒田さんと会うたびに短い会話をするようになり、いつの間にかペン友となった。

大変な読書家で、それをご自分のテーマとして文章にまとめられ、ペン友たちに配っておられた。本にされたり冊子にまとめられたものもある。

テーマを持つ論文とともに『神さま』という詩集もよく見せていただいた。神様への短い言葉は詩の形であったが、駒田さんの祈りのことば、神様へのつぶやきでもあった。理論的な論文と詩、これが駒田さんとの会話の源だった。

駒田さんは定期的に本屋巡りをされていたようだが、その本の質と量は大変なものだったに違いない。高価な専門書を惜しげもなく購入されていたようである。

同じ本を買っちゃったので「

とあるとき本をいただいた。人が買わないし読まないような、専門家の資料になる本だった。そしていま私の本棚には駒田さんから頂いた本が三冊並んでいるのである。

『新体詩 聖書 讃美歌』

『日本語のために』

この二冊はあまりにも難しく、何かの調べものをするときに開く程度だった。駒田さんはそれを辞書のように用いておられたのだと思う。

最後にいただいたのは『美しい日本語帳』これは私でもわかる本で、日本語の豊かさを記した本だ。花の章、色の章、空の章に分かれて、言葉の由来や使い方や詩などが紹介されていた。

駒田さんの訃報に接し、改めてこの本を開いてみた。駒田さんはどの花が似合うだろうか。金木犀のページでふと駒田さんを思った。ご自分を自ら伝えることはなさらない、しかしその生き方をしっかりと伝える方。

空の章では、紺碧という言葉が似合うかと思った。「見わたす限りの紺碧は永遠で一瞬」と記されていた。多くの方が駒田さんの写真はがきをいただいていた。澄んだ青に生える木や花の美しさが懐かしい。

駒田さんは日本クリスチャン・ペンクラブみんなのお兄さんだった。

ずっと 大切な先輩 西山純子

そちらでも読書なさっていますか？

歌っていらっしやいますか？

それとも執筆中ですか？

もしかしたらお得意料理中ですか？

天国では、駒田さんはきつと益々ご研鑽の間がたつぷり、ただで面白いうように書かれているのかもしれない？

真摯で明るくにこやかな駒田さんは、きつと、そちらでも人気がおありなのでしょう？

満江巖理事長の後を継がれた池田勇人先生に詩歌の会をやってくださいと申されて拙い私が名前だけ責任者のようなことをさせていただきました。その折に中心になって多くの詩人の学びをしてください、詩歌の会には、そのお話をしてくださいました。皆さん、楽しみになさっていました。この会の学びのための研鑽が起点となり、その後の駒田さんのご研鑽は素晴らしいものでした。

謙虚な彼は「もし、お時間が在ったら読んでください」と、折に触れて一冊の冊子にして

ださり、多くの詩人、作家、評論家、書物に関して手造りの一冊をお贈りくださいました。

遠慮深く、何人かの方々に送られたのだと思います。

不勉強な私は、どんなにお教えいただき、楽しませていただき、学ばせいただいたことでしょう。

その冊子は積み上げるほどの数になりました。

特にドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」に関しては理解力の遅い私のため、「大審問官」を再三ご指導いただきました。

カラーの写真絵はがきを作られるのもお得意でした。空の青、深い緑も含まれた水の色、華やかな花々、他にも色々なことに堪能な方だったと思われま

ずつと居てくださいのだと、勝手に思っていましたから、本当にガツカリしました。寂しい気持ちも消えませんが、でも神様は、ちょうど良い折に「良い働きをしました」と、天にお迎えくださったのです。

本当にありがとうございました。

駒田さん また お会い出来るのを楽しみにさせていただきます。

天国への手紙 篠田一志

駒田隆様へ

二〇二二年十月一二日夜、三浦代表から会員宛の一斉メールが届きました。

表題をみると「駒田隆兄召天のこと」です、あなたが天国に旅立ったことを知りました。

はじめ、驚きましたが、三浦代表のメールに「力いっぱい生き抜いて最後まで書き続けた兄の生き方を見習いたい」との一文をみたとき、きつと、あなたは充実した地上での生活を過ごされて御国に旅立たれたのだと思えました。

それでは、またお会いする日を・・・と、お別れの挨拶となるのですが、その前に一つお願いがありまして、この手紙を書かせていただきました。

それは、まったくの私ごとなのですが、百花繚乱（自分史）のなかで、あなたの作品「道」を拝読させていただいたとき、思わず「えー！」と声が出てしまいました。

マルクスの資本論片手に「アジプロ」しておられる駒田さんがおられたからです。

また、ラブレター、ミュージカル、ハンドベルなど奥様との思い出話しも見つけました。

なかでも、レッドページの風をやりすごされ

た駒田さんの方法には驚きました。それが、クリスチャンへの道に繋がっておられたとは、ほんとうにビックリしました。

すると、活字だけでは物足りず、お声を通して駒田さんの自分史に触れてみたいと思うようになりました。

が、コロナ感染が勃発です。一向に収まる様子もありませんでした。

そして、今日の日を迎えてしまいました。

でも私たちクリスチャンには希望がありますね。地上では叶いませんでしたが、天の御国ではいかがでしょうか。

お願いとはこのことです。

わたしもいつかはそちらに参ります。そのとき、いろいろとお忙しいと思いますが、一度時間を取ってくださいませんか。

最後になります。ペンクラブのご指導ありがとうございました。

そして、またお会いいたしましょう。

後輩より

## プログラム人間駒田さん 長谷川和子

駒田兄は時間を有効に使い、毎日の生活を時間通りに熟(こな)していく方であった。

真似をしようとやってみたが、雑用におわれず、しまい続かなかった。

様様の本や資料を読み、研究され、その成果をまとめてA4版で送って下さった(私だけではなく他のJCPの方にも送っていたようだ)

その数は結構な束となって、本棚に入っている。

高齢になってもその研究は衰えることなく、つい最近まで励まれていたように思う。

「その勢いはどこから来るのか」といつも驚かされていた。

また、よく絵葉書を下さった。ご自身で撮られた花や空の様子を葉書にされて短文が添えられていた。この短い文章に触れる度に故満江先生を思い出すのである。先生も短文の葉書をよく下さった。

ここに平成二九年八月に頂いた鉄線(てっせん)の花を撮られた葉書がある。そこには次のような文章が載っている。「ハレルヤ、変な天気が続いています。体調はどうですか、もうなれ

ましたか わたしは相変わらずプログラムのどおり動いています。変なものです。プログラムがあると安心して年を忘れて動けます」と。たしか駒田兄はこのとき八六歳であったと思う。この文面通り、一日をご自分のプログラムに添って生活していたことが分かる。だからプログラム人間、と自身のことを称していた。「役所に勤務していたときから分刻みに仕事を熟(こな)していたのでそれが身につけてしまつて、家庭の中でもそのようにしていたので、女房は大変だったと思う」と話してくださいました。

このように記すと駒田兄は真面目で堅物の人間かと思いきや、茶目つけない部分もあった。あるとき「長谷川さんの胸は柔(やわ)らかかったよ」と言った(えっ何時私の胸にさわったのかしら)と思い「私の胸に触れたんですか?」「そうですよ、この間エレベーターが混んでいて、ぼくの手の甲があたったんです」そんなことがあったかしら、覚えがない、そのように言われても「そうですか、私は分からなかったわ」と苦笑しながら返事をしたように思う。駒田兄の意外な面を見た気がしたものである。

私たちペンクラブでは「文学散歩」に出かけることがあった。そんな時駒田兄は必ずカメラ



を持参し、まわりの景色はもちろん私たちにもシャッターを切って下さった。

俳人正岡子規の住まいを訪ねたとき、係りの人から一頻(ひとしきり)説明を受けた後庭を散策した。花から花へと、ゆつくり歩きながら・・・。その様子を写して下さったのは駒田兄であった。

その写真を見るたびに「皆若かったなあ」と当時のことが思い出される。

駒田兄は人生無駄なく、一分一秒と歩まれ方であった。高齢になってからも石岡からお茶の水の例会に出席されていた。

駒田兄は駒田さんらしく悔いのない人生を全うされたのではないかと思う。

何時の日か私たちも天国で駒田兄と相見えるであろう。その時まで日々駒田兄が時間を大切にされたことを手本にしながら過ごしたいと思っている。



## 四十年來の友 三浦喜代子

駒田兄とはもう四〇年以上、このペンクラブで一緒した。ちょうど私の一〇歳上。出会ったころは老年に見えたが、昨今は同じ高齢者として一括りの仲間になった。

十も歳上なのに生活の仕方、志への向かい方に少しの乱れもなく、それこそ十年一日のごとく急がず遅れず、時計の針のように正確に人生の時を刻み続けた。

「あかし文章」をたゆまず書き続け、人物伝、評論の作品を編み、時に詩を創り、俳句を吟じ、短歌を詠んだ。創世記から黙示録までたくさん資料を基に講解し、それらすべてをペーパーにして仲間たちに配布してくださった。近年は会合で会うたびに手渡され、楽しみだった。コロナで会えなくなつてからは郵送で送られてきた。どんな時も研究、執筆を継続された。

旅の人でもあった。毎年かならず京都、奈良へ往つた。カメラ提げての一人旅、宿も決まっていたと聞いた。必ず小さなお土産をくださった。匂い袋は今もバッグに収まっている。

月一回は必ず上京した。神田の古書街を歩き、

銀座では教文館でキリスト教の本を買い、老舗で洋食を楽しんだ。これも一人旅と聞いた。

初老の頃、奥様を喪い、乗り越えるのがきつかったようにお見受けしたが、立ち直つて一人老いの坂を上つて行かれた。

いつも電子辞書を携帯していて、作品の小さな誤記も辞書を見せながら教えてくださった。虎屋の羊羹もゴディバのチョコも好物だった。ある時、転んだと言つて杖姿で現れた。苦笑気味であった。その次は、杖はなく、胸を張つておられた。

コロナ禍で、休会続きの、その間のお別れだった。九二歳。歳に不足はないとはいえ、私たちの喪失感は大い。しかし兄の見せてくれた「老いの生き方」は私の中ですでに大きく反映している。崩れそうになつたとき、最適なカンフル剤になつてくれるだろう。

今ごろ兄はひよっこりイエス様のかたわらにすわつて、微笑みあつていらっしゃる。だれよりもイエス様が大好きだった兄の愛を、主は喜んでおられるに違いない。

編集後記

篠田一志

★新型コロナの第八波が始まりました。ウクライナとロシアの戦争もますます激化しています。まるで、闇の支配のなかで二〇二二年が暮れかけているようです。

でも、私たちは、ほんとうの支配者は光であることを知っています。

光は闇を照らしつづけています。そして、救いがあり、勝利があることを知っています。

文は信なり45号には、その光を特集しました。

光に出会い、救われた者の声があります。悲しみや苦しみが光の管を通して癒やされた喜びの声を聞いてください。

また、二〇二二年一〇月、会の重鎮として活動されていた駒田兄が天に召されました。この度、有志による兄弟の思い出を掲載いたしました。どうか、全うされました、兄弟の光の人生に触れていただければ感謝です。

★島本権子姉の天の報 三浦喜代子

この45号編集の最中に姉のご主人様から召天のハガキが届きました。思わず力が抜けて座り込んでしまいました。姉はお歳には不足なく、

難病もかかえておられたので、主の御もとに帰られてホッとされていくと思いましたが、地上の私たちは再会までの日を思うと、たとえようもなく寂しく辛い思いがわく。

島本姉とは二十年ほどのお交わりでした。初老の頃JCPに入会されました。戦争中の体験があり鮮明な記憶をもとにエッセーを紡いで披露していただきました。その文体は、木綿と絹の間のような独特の風情があり、雰囲気を作っていました。JCPの活動の一つ「電話とエッセーの会」には欠かさず出席され、批評も得て達者でした。いつも和服を召されていたのも私たちに大きな楽しみでした。

お元気なころは一泊の「文章合宿」にも「文学散歩」にも積極的に参加され、あかし文章に励んでおられました。

★この一年、JCPはくり返すコロナの大波に揺さぶられながらも、精一杯工夫してできる限りの活動を続けてきました。自画自賛かもしれませんが…

例会は一回リアルで、電話とエッセー「三回」、二回はオンラインで。文は信なりは二回発行できました。HPは日々更新！充実の一途を進んでいます。

日本クリスチャン・ペンクラブ（JCP）紹介

★起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

★現在は2つのブロックで活動しています。★関東ブロック（関東以北の地域）★関西ブロック（大阪周辺と西の地域）です。活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最新作は関東が『百花繚乱 21人の自分史』（1800円＋税）を、関西が『種を蒔く5号』（1300円＋税）を発行しました。ご希望の方は事務局までご連絡ください。

★Web上にホームページを開いています。[\(http://jcp.daa.jp/\)](http://jcp.daa.jp/) ぜひご覧ください。

◎「あかし文章」に関心のある方は上記URLにご連絡ください。 本誌代一部 200円